右脳損傷と非失語性コミニュケーション障害

筧　一彦 (1)、野村寿美江 (2)、八田武志(3)
（1）名古屋大学大学院人間情報学研究科、（2）日本聴能言語福祉学院
（3）名古屋大学情報文化学部

目的：右脳障害によって非失語性のコミニュケーション障害が起きると云われている。コミニュケーション障害には多くの要因が存在すると考えられるが、ここでは、（1）話し手の感情理解に対するパラ言語情報の利用と（2）間接的表現の理解の、二点について健常者と左脳損傷者の機能と比較し、右脳損傷に特徴的な機能障害があるかについての検討を行った。

方法（対象）：　（1）に対しては、それぞれ約 10 人の右脳損傷群、左脳損傷群、健常群を対象とした。言語的には、話し手が快、不快、中立であるような文を作り、それぞれについて快、不快、中立の読みを行って 9 種類の刺激文セットの複数準備した。この刺激文を被験者に聞かせて、話し手の気持ちを評定させた。評定は、快の気持ちや不快の気持ちを表す用語を各一語ずつ適当に選択してセットを作り、紙片に記入したセットを複数用意して、そのセットの中から話し手の気持ちとして適当と思うものを一つ選択させた。このような実験の実施過程において右脳損傷者から言語情報とパラ言語情報のどちらに着目して判断するのかという質問が出たこともあり、右脳損傷者群には、パラ言語情報に基づく評価も行わせた。
（2）に対しては、（1）の場合とほぼ同じ被験者群を対象とした。間接的表現を含んだ会話文（拒否、皮肉、要求）と直接的表現文を複数作成し、4 コマ形式の漫画で、文脈を与えた。コマの進行は、A，B 二人の話者の会話の対話形式とし、判断の対象となる間接的表現を含んだ文は会話の最後尾にくるように構成した。被験者は、4 コマ目の発話者が何を意図して発話したのかを直感的に推測し、実験者が用意した 3 つの文の中から最もふさわしい文を選択することを求められた。またその選択の理由も併せて述べるようにした。

結果：　（1）に射しては、右脳損傷群は、他の群に比較してその判断は有意に異なっており、言語情報にのみ依存した判断が多かった。またパラ言語情報に対する判断に関しては、健常と同じように判断するものと従来右脳障害の特徴とされているようにパラ言語情報に対する判断ができないものとがいた。しかし注目すべき点は、パラ言語情報に対する判断が可能なものであっても、言語情報とそれをうまく統合できないという結果が得られた点である。
（2）に対しては、左脳損傷群では、字義通りに解釈する誤りがほとんどで、
右脳損傷群では字義通りの解釈と無関係な文を選択する誤りが半々であった。しかし、この結果は、選択理由などと考えあわせると字義通りの反応をしたというよりも文脈それ自体の理解が困難であるように見られる。

考察とまとめ：　上記の結果は、バラ言語情報の処理は右脳において行われるという従来の考えを一部支持するものであったが、右脳損傷のコミュニケーション障害の要因としてはにイベント等の処理の統合に問題があることを示唆している。現段階では、被験者数が少ないことおよび損傷部位とその程度と障害の対応についての検討がほとんどなされていないので、今後さらに検討を進めたい。